

23/7

TWENTY THREE SEVEN

四時 侵食と絶望の王



NOVELIZE

氷上慧一

ILLUST

凧良

第一部 一章《1》

並行世界からの強襲

●
1

暗い、暗い、暗い、闇の底……。

およそ命の気配というものが存在しないその場に、ある時、不意に誰かの声が響き渡った。

——我、天翔ける金色なりし一二の座
我が名において、汝を眷属とす——

まるで神のごとき威厳に満ちた声。

——我が力は汝が器に、汝が命は我が剣に

この場、この時より、互いの命尽きるまで——

闇の向こうに降り立った誰かは依然として姿を見せず、
淡々と、言葉のみを紡いでいく。

——我は汝を見捨てず、汝は我を欺かぬ

これ、すなわち誓約なり——

全てを唱え終えた後、声の主は小さく息を吸い込んだ。

「さあ、はじめようか……?」

全ての始まりを告げる声。

誰に向けたともわからない声。

それは、闇の中に染み渡り、拡散し、やがて消えていく。

あとは元通り、まるで命の気配がない闇だけが満ちる世界が戻ってくる。
唯一、声が聞こえる前までと異なっているのは、

——カッチコッチ、カッチコッチ……。

どこからともなく、時計の歯車のような、無機質で規則正しい物音が漂いはじめたことだった。

● 2

アメリカの東海岸沿いに、この国最大の都市が存在していた。

市域人口は八〇〇万人を超え、世界有数の金融街があり、世界有数の文化の発祥地であり、世界有数の人種の坩堝（るつぼ）でもある。

「二三」時間眠らない街——ニューヨーク。

ドライなりアリスト達が街を闊歩し、ウォール街では様々な数字が飛び交う。夢や希望といった本来は不確実性を含んだ言葉でさえ、この街の住人にとっては乾ききった現実の先にしか存在していないのだろう。

理解できないことや支配できないものを次々と削り、全てを人の理（ことわり）だけで満たして作られた街の中心地には、世界的にも有名なエンパイア・ステートビルが存在する。

人の力の「象徴」のように天高くそそり立つその超高層ビルの直上に、ある日、唐突に揺らぎが生じた。

最初はただの局所的な蜃気楼にしか見えなかっただろう。

しかし揺らぎは見る間に濃度と範囲を増していき、まるで空気と空気の間に見えない隙間が存在し、その中から顔を出すかのように突如として謎の物体が出現したのだった。

ひと言で表現すれば、それは機械仕掛けの巨大な柱である。

サイズは、直下に存在する超高層ビルの数倍の規模にも達し、柱を中心として円環が浮遊している。機械的な構造物でありながら、その姿はまるで魔法使いの杖だとも言われた方がしっくりくるほどの非現実感に充ち満ちていた。

異常はそれだけに留まらない。

人々が気づいた時には、巨大な柱の中から奇妙な物体が群れを成して現れていたのだ。

いくつかの機械部品を組み合わせた本体部分を、四本の脚が支えるような形で動き回る。自走する箱といった表現が似合いそうになるそれは、機械らしい、ぎこちない動きであたりに散らばっていく。

大きさは1mほど。小さな体と四本の脚を駆使して様々な場所に入り込んでいったそれらは、人間を発見するとそれまでの緩慢な動きを急変させる。

本体に直に接続した射撃武器を乱射し、あるいは内蔵された炸薬で周囲もろ

とも自爆する。

それが自分達にとって脅威になると人々が気づいた時には、既に数え切れな
い程の数のそれが街中に放たれ、自分達が築き上げた道の隅々や施設の奥深く
にまで入り込まれてしまっていた。

警察が遅まきながら特殊部隊を出動させるが、圧倒的な数の前にはまさに焼
け石に水にしかならない。

人々は、自分達が信じていた「常識」がいかに薄っぺらなものだったのか、絶
望と共に思い知らされたのである。

同様の現象はフランスのパリでも発生し、人々を混乱の極みへと押しやった。
形は違えど、それらはいずれも人の世界を壊す存在である。

そしてその異常事態は、日本の東京にも及ぼうとしていた……。

東京。

日本で最も栄えた場所というイメージがあるこの街だが、住んでみると坂が多く、意外に不便を覚えることが多い。

特に車やバイクを持っていない学生は、公共交通網から外れた途端にそのことを思い知らされる。

「いつものことだけど、帰りに上り坂っていうのは気が滅入るなあ」

同じ高校のものとおぼしき制服に身を包んだ二人の少年と一人の少女が、夕闇の迫る坂道を歩いていった。

少年の一人は中肉中背で、髪型や眼鏡からことなく内気な印象を受ける。髪の色が見る角度によって、ほんのわずかに青みがかって見えるが、それを除いてはごく普通の少年である。

「部活終わりだと特にそうだよなあ」

もう一人の少年がそう言った。

すらつとした長身。明るい色のメツシユを入れた茶髪で、少年としては長い髪をヘアピンで留めている。顔立ちもどこかの芸能事務所にでも属しているのではないかという華のある出で立ちである。最初の少年の大人しい風貌と比較すればずいぶん目立つ存在だった。

「部活終わりって言ったってフェンシング部のヒカリや空手部のあたしと比べて、陽太、あんたなんて軽音部じゃない」

それまで二人の会話を聞いていた少女が口を開いた。

小柄だが姿勢がよく、スポーツで鍛えていることが姿に現れている少女である。快活な笑顔や動きやすそうなショートボブの髪型が彼女の弾けるような魅力を彩っていた。

「ばっか、ギターってのはな、本気で弾いたら体力消耗するんだぜ！ なにせ

魂を込めてるんだからさ！」

「あんたの場合、込められているのは女の子にもてたいっていう邪念でしょう」

「ぐ、ぬう。うえと……、そ、そう言えば、ヒカリの家って今日から一人なんだろう？」

旗色が悪いと感じたのか、陽太はあからさまに話題を変えに走る。

「え、ああ、ニューヨークで時計職人を集めたフェアをやるらしくて、今朝から父さんと母さんが一緒に出かけて行ったよ」

「ヒカリのお父さんとお母さんって、いつまでも仲がいいよねえ」

「仲がいいって言うか、父さんは無愛想なんだけど、母さんが一方的に世話を焼きたがるっていうか……。別に母さんがついていかないといけない事情なんてないだろうに、不便で仕方がないよ」

神名ヒカリ、星野陽太、緒方優紀菜の三人は同じ高校に通う三年生で幼馴染

みだった。

三年であるからには受験生である。ニューヨークでの仕事に同行するとなると一週間は帰ってこないだろう。必死で受験勉強に打ち込まなければならぬほどランクが高い大学を狙っているわけではないが、それだけの期間放っておかれるとなると「おいおい」とは思ってしまう。

「じゃ、じゃあ、私がお飯作りに行つてあげようか？」

しばらく考え込んでいた優紀菜が、思い切つたようにそう言いだした。

「優紀菜が？　なんか、お前が包丁使つと、料理にまな板のカケラが紛れ込みそうだしな」

優紀菜の日頃の言動を思い出し、ヒカリは思わず半眼になった。

「私だつて、空手をやってる時と、そうでないときの力加減ぐらいするし！」

「……前に俺らの前で、えいっ、とか、とりゃ、とか言いながら野菜を刻んでいたのはどこのどなただよ？」

「あれはね！ カボチャの皮が分厚かつただけなの！」

「はいはい、困ったら頼むよ」

「その態度を覚えてなさいよ！ 私の料理は絶品なんだから！ 今度、一撃必殺ハンバーグをご馳走してあげるわ！」

「違う意味のご馳走に聞こえてくるんだけど……」

「俺も同感……」

「ええっつ！ なんでよ、美味しいんだから！」

いつものやり取り。

一人で歩いていたら苦痛だっただろう時間も、気心が知れた幼馴染みと一緒ならちようどいい長さだった。

「時計と言えは、アレやってくれよ」

陽太が思い出したようにそうせがんでくる。

「また？」

そう言いながらも、ヒカリはポケットからスマートフォンを取り出して、とあるアプリを起動していた。

「何回見せてもらっても、どうしても理屈がわかんないんだよな」
「ほら、いくぞ」

陽太がさかんにクビを傾げるのを横目に見やりながら、ヒカリはもう恒例となりかけている遊びをはじめめる。

「スタート！」

アプリ内のスイッチを入れると同時に、操作画面を陽太と優紀菜に向けた。自分には表示されている内容が見えないようである。

そうして自分の感覚が訴えるタイミングをわずかも逃さず、ヒカリは再度、アプリのボタンに触れた。

「さて、どうかな？」

言葉とは裏腹に、ヒカリには成功した確信があった。

「わ、ピッタリだね」

「あゝ、今回もピッタリ一〇秒……。マジでわかんねえ」

ヒカリが起動させていたアプリはストツプウォッチである。

そしてその表示は「00:10:00」——つまりちょうど一〇秒。ヒカリはストツプウォッチを一〇秒ちょうどで停止させるという特技を持っていた。

「別にこんなの、真似できたところで何の得にもならないだろ？」

もちろん「特技」というほど誇りを持っているわけではなく、ちよつとした座興である。一応、一〇秒としているが、一〇秒しか止められないわけではない。指定されれば何秒でも対応できる。しかし、自分からすれば「だから？」という感じだ。一度見せて以来、陽太の方が面白がってこうしてせがんでくるのである。「それはそうなんだけどさ、なんていうか、好奇心？ 同じ人間なんだし、お前にできて俺にできないってことはないと思うんだけどさ、何回見せられてもその特技だけは真似できる気がしねえ！」

見た目通りというか、何かにつけて陽太は器用で、そんな幼馴染みが悔しがる様子を見るヒカリはなんだか得をしたような気がしていた。

「陽太じゃないけれど、本当に不思議よねえ」

何の変哲もないスマホの画面を優紀菜はしげしげと覗き込む。

「たぶん、父さんが時計職人をしている関係で、小さい頃からカッチコッチと時計の音に囲まれてきたせいでしょう」

こういうのも英才教育というべきなのかはわからなかったが、自然と正確な時間感覚が身についた理由はそのぐらいしか考えられなかった。

「よし、次こそお前のテクの秘密を盗んでやるぜ！」

「よし、いつでもこい！」

「まったく、男子はく。そんなことして何の役に立つのよ」

「わかってないなあ、一見どうでもよさそうなことに情熱を注ぐのが男ってものなんだろ？」

ふふん、と何故か得意げになっている陽太に、優紀菜はニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべ、

「ふくん、そうなの。情熱を注いでいるのはどうでもいいことなワケね？　じやあ、あんたが熱心に仲良くなるうとして、いる女の子達に言っついてあげようかなあ。いや、私って親切だなく」
などと切り返す。

「わっ！　ばかつ！　それとこれとは話が違うだろうが！」
日常のささやかなやり取りである。そんな会話が毎日、それぞれの家に向かう分かれ道に到着するまで繰り返されるのだ。

● 4

周囲はすっかり日が暮れて暗くなっていた。

「じゃーな」

「また明日」

「ばいばい！」

分かれ道につくと、手を振って、家までわずかな距離を一人で歩き出す。一人になり、口を閉ざすと、静けさと共に気持ちまで鎮まり、先ほどまでの浮き立った気分が嘘のようになっていった。

少し歩くと自宅にたどり着く。

住宅街の中にある、店舗兼用の小さな自宅だ。商売のことを考えればもつと表通り沿いの方がいいはずだが、父は立地条件のいい場所に引っ越したり店舗を別に借りるということをせずに、この場でひっそり商売を営んでいた。

ヒカリにはよくわからないのだが、腕はいいのかほとんど口コミだけで仕事を得ており、どうにか親子二人が生活できる程度の稼ぎはあるらしい。

「さて、今日から一人暮らしか……」

洗濯物は溜まっていけないから、とりあえず食事の支度をして、ネットでも巡るかと思えながら自宅の玄関扉を開けて中に入った途端、ヒカリは完全に思考停止した。

「な——っ!？」

真っ白だった。

頭の中がではなく、家の中が。

慣れ親しんだ扉。

それを開けた奥には家族二人で使うのにちょうどいい程度の狭い玄関があって、片付けきれない荷物が置かれた廊下が奥へと続く——はずだった。

ところがそれらが、ヒカリが一八年間慣れ親しんだ当たり前の景色がどこにもなかったのだ。

「白——?」

白い。

圧倒的な白。

扉の中を、例えば白いペンキで塗りつぶしたとかそういう、ある意味で常識的な事象だったわけではなく、壁も、天井も、床すらも消え失せ、ただ純白なだけの空間が広がっていたのだ。

気がつけば、ドアノブを握っていたはずの扉も、外界への出入り口さえも消え去り、ヒカリは完全にこのワケのわからない場所に閉じ込められていた。

恐る恐る一步を踏み出してみる。

見えないだけで、地面の感触はあった。

それでも、木材なのか石材なのか、それとも土むき出しなのか、靴底越しに伝わってくる感触からは何も判断できない。

おまけに、空間にはいくつもの時計が浮かび——文字通り宙に浮かび漂っている——それらの針がカチカチと規則正しく時を刻む音だけがこの不気味な空間に響き渡っていた。



「ここは、どこなんだ……?」

確かに家に帰ってきたはずだが、とてもではないが自分が知っているものと同じ場所とは思えなかった。

しかも――、

次の瞬間、ヒカリは咄嗟に身をかがめた。

何か背後にぶつかるとような衝撃を受けて、数歩たたらを踏む。

反射的に顔を上げれば、そこにいたのは大型犬――のような生き物だった。犬とは言い切れない。

何故なら、その生き物はヒカリと同じぐらいの体格を誇り、紫色の毛皮を持ち、両目はまるで血のような鮮やかなルビー色に輝いているからだ。しかも全身には鋼の鎧をまとっているとなれば、もはやこれがただの犬であるはずがなかった。

それがいつの間にか何頭も現れヒカリを取り囲んでいる。

「ガアアアアッ！」

大きく顎を開いて飛びかかってくる獣の迫力に、足は完全にすくんでいうことを聞いてくれなかった。

「うわっ!？」

思わず両腕で顔を庇ったが、直後ヒカリに飛びかかった化け物犬の体があらぬ方向へと吹き飛ばされていた。

自ら跳んだわけではない。

姿勢は崩れ、無様に腹を見せながら、化け物犬はヒカリから離れた場所に投げ出され悲鳴を上げていた。

「君は……!？」

何者かの気配を感じ振り返ると、そこに一人の少女が立っていた。

銀髪の、伶俐な美貌を持った少女である。年齢はヒカリと同年代だろうか。黒を基調とし赤紫色のラインが入ったセーラー服のような装い。部分的に和服、

あるいは巫女服のような飾りがあしらわれていた。

「大人しくして置いて下さい」

それだけを言うと少女は気負いを感じさせない、しかし鋭い動きで次々と化け物犬の群れに攻撃を加えていった。

手にしているのは、日本刀。

鋭い斬撃は、軌道の閃きを目で追うのがやつとといった流麗な技を繰り出し、次々と化け物犬をチリにかえていく。

確かに実体があったはずだが、まるでCGか何かで作られていたのではないかというほど、跡形もなく消えてしまうのだ。

謎の空間、正体不明の生き物、見知らぬ少女、意味がわからないものが山ほど押し寄せたおかげで、ヒカリにはもはや疑問を感じるだけの余裕も残っていなかった。

化け物犬を始末した少女はヒカリの元にやってくる。驚いたことに、息一つ乱した様子はなかった。

「……無事ですか？」

ヒカリの頭から脚の先までを見ながら問う。

「え、あ、うん。僕を、助けてくれた……のか？」

無事だというヒカリの返事に満足したのか少女はヒカリからの問いを無視して別の方向を見た。

会話の流れが完全に断ち切られた形である。自分から再び問いかける気にもならず、自然とヒカリは少女が何をするのかを眺める格好になってしまっていた。

(恐ろしく無愛想な女の子だな……)

半ば呆れ、当てこするのように内心で少女のことをそう評する。そうでもしていないと間が持たなかったのだ。

「あれ……?」

いつまでも凝視している訳にもいかず視線を切ると、病的なまでに白一色だった周囲の景色に変化が現れはじめていた。白が崩れ、見慣れた街の風景と入れ替わっていく。

そこでヒカリは一つ、違和感を覚えた。

ヒカリは確かに家の中に入ったはずだというのに、外の風景が見えるということとは、いつの間にか外に出ていたということになる。

「いや、そうじゃない……?」

あたりを見回して、根本的に間違っていることに気づいた。

外に出ていたわけではなく、ヒカリが立っているのは間違いなく本来は家の中だった場所である。

ヒカリの足は今、家の床ではなく、瓦礫の山を踏みしめていた。地面には、かつては床を覆っていただろ板の切れ端だったり、見慣れた壁紙だったり、父親の商売道具だった懐中時計などが散乱している。

間違いなく、ここはヒカリの家だった場所なのだ。

何が起こったのかはわからなかったが、直前まで、あの奇妙な空間に閉じ込められていたことと関係していることだけは間違いない。

そしてその残骸の中、唐突に幾人かの人影に気づく。

「父、さん……？」

瓦礫の上に立つ幾人かの内の一人は壮年の男性だった。

日本人にしては高い身長、物静かで理知的な顔立ちに無造作に生やした無精髭が印象的である。

ヒカリの父親、神名仁だ。しかしヒカリが戸惑ったのには理由があった。顔立ちも服装も、今朝家を出て行った時の仁そのものである。しかし服の上から

見慣れないものを身につけていたのだ。

赤い、日本の武士が使っていたような武者鎧のようなものをまとっている。何故か右側の肩、腕、脚と右半身だけが覆われていたが、破損した様子がないことから見れば元からそのようなデザインだったのだろう。

おまけに日本刀のような武器まで携えている。

たちの悪い冗談のような光景だが、他の顔ぶれも似たようなものだった。一人は先ほどヒカリを助けてくれた銀髪の少女——彼女は仁の側で彼を守るように付き従っていた。

対して、仁達に対峙するようにして二人が立っている。二人とも女性だ。一人は、まるでどこかのパーティから抜け出てきたかのような、両肩が露わになった妖艶なドレス姿である。

もう一人は明らかにヒカリより年下に見える少女だった。こちらも両肩が露わになった服装ではあったが年齢や顔立ちの幼さのせいか色気よりも可愛ら

しさの方が先に立っていた。

街中で立ち話をしていたのではないことだけは明らかである。何故なら仁は体のあちらこちらに傷を負い、泥にまみれ、息を乱していたからだ。

「父さん、父さんだろ!? 何やってんだよ! ニューヨークに行ってたんじゃないのか!? その怪我は……。それに母さんは一緒じゃないのかよ!」
気がつけば家が粉々に吹き飛ばされている。

爆発でもしたのかとも思ったが、それにしても周辺の家屋への被害はないし野次馬が出てくる様子もない。

何より、先ほどまでヒカリが迷い込んでいた場所は何だったのかがまるでわからない。

次々と起こる不可解な出来事の連続に、ヒカリの思考能力は完全に飽和状態になってしまっていた。

「あら、可愛いご子息が混乱しているではないですか……。答えて、差し上げな

「いのですか？」

反射的に、ヒカリは女のその声に反感を覚えた。

言葉面だけを見れば親切な申し出をしているようにも聞こえるが、その声には濃厚な敵意が込められている。

フェンシングの試合で対戦相手から感じる気配を、何十倍も濃密にしたような……もはや、殺意と呼ぶに相応しい感情が、静かな声の裏側に塗り込められていた。

仁は何も答ええない。

呼吸は乱れきったまま、それでも女から一瞬も目を逸らさず、手にした日本刀のような武器を携え、構えを崩さなかった。

「さすがはこの世界——バース7を支配するクロツカーズ。こちらはあなたをおびき出した後で拠点を占拠しようと狙っていたのですが、状況を察し、一瞬で空間を渡って帰ってきたということでしょうか？」

挑発の色が強い言葉。

仁は「ふう」と深く息を吐き出すと、ようやく口を開いた。

「逃げろ」

それはヒカリと従者のように仁の側に控える少女に対して向けられた言葉のようだった。

「先ほど助けました。あとは彼次第です」

「何を言っていて……」

仁の言葉は、誰の問いに対しても答えていなかった。苛立ちを覚えるヒカリだったが、敵対しているはずの女は少しも取り乱さず、かえっておかしそうに「ふふ」と短く笑みを漏らした。

「まだご子息は目覚めていらっしやらないようね」

女はヒカリに向き直る。

まだ間合いは離れているというのに、体にのしかかるプレッシャーが強まり、

びりびりと肌の表面に物理的な刺激を感じるほどになった。

「チツ……」

仁は舌打ちをし、ヒカ리를庇うように徐々に立ち位置を変えていく。

「決めたわ。先にご子息の方を始末しましょう」

「むざむざやらせると思うか？」

傍目に見ているだけでも仁は弱っているとわかり、それが目の前の女にやられたのだとすればとても勝てるとは思えない。

それでも、仁の静かな闘志はわずかも揺らがなかった。

「ふふ、面白い。カリカ、七時の王はお前が相手をしなさい」

「えっ、わ、わたしがっ!？」

「ええ、あれだけ弱っていけば足止めぐらいはできるはずよ」

女は一緒に連れてきたまだ幼い少女に驚くべき指示を出した。

カリカと呼ばれた少女やヒカリはもちろんのこと、これまで仮面のように冷

静な表情を崩さなかった銀髪の少女までもが初めて驚きに目を見開く。

「おい、舐めているのか？」

仁の声が凄味を帯びた。

いくら消耗していたとしても、親子ほども年が離れた少女をけしかけられて癢に障ったのだろうか。

「舐めているかどうかは、自分で確かめなさい！」

言うが早いか、女はヒカリを目がけていきなり走り出した。

「くっ！」

仁はそれを防ごうと動くが、それより早くカリカが仁の行く手を阻む。

その動きは、言われたからとりあえず立ちふさがってみただけというようなたどたどしいものだ。

「お嬢ちゃん、悪いことは言わないからどきなさい」

仁が焦れた声で諭すが、あまり気は進まない様子の少女もさすがに引き下が

ることはできないと、強張った顔で首を横に振った。

少女は腰のあたりに差していた杖を引き抜き構える。頭部分に羽とハートをモチーフとした飾りが施されている、何かの祭典に用いるような華やかな造りの杖だ。

「わたしだって、わたしだって戦えるんだからっ！」

そう叫ぶと同時に杖の先端から爆発的に炎が広がった。

「うくっ!？」

仁は慌てて体をよじって炎から逃れる。少女はさらに炎を放って浴びせかけた。まるで火炎放射器である。

回避しようとするが、消耗しきっているためなのか仁は足をもつれさせる。転倒しかかったところで、側に控えていた銀髪の少女が動き仁の体を引っ張って炎の及ぶ範囲から引きずり出した。

安堵しかけたヒカリだが、仁達が逃げても新たな炎が生み出されしつこく追

いすがる。完全に二人は足止めされてしまっていた。

「ヒカリ、逃げろっ！」

「そんなことを言ったって——！」

ヒカリは食い下がった。こんなわけがわからない状況で、仁を置き去りにできるはずなどない。そうしてヒカリがためらっていると、黒い槍を携えた女は常人離れした速度でこちらに迫ってきた。

もう間合いに入る直前だ。

「我が名はブリュンヒルデ！　神名ヒカリ、クロツカーズの名の下にお前を殺す！」

衝撃的な宣言を受け、反射的にヒカリの目は黒い槍の穂先に釘付けになっていた。

それは本物の刃物だ。

刃を潰した模造刀ぐらいなら見たことはあったが、ブリュンヒルデが振り回

しているそののギラつきは本物凶器だけが持つ禍々しさに満ちていた。

「どうなってんだよ、これは！」

咄嗟に、間違いなく咄嗟に、ヒカリは側に突き立っていた鉄パイプを引き抜いた。それがすんなり抜けたのは間違いなく幸運だっただろう。運が悪ければコンクリ片に食い込んでいたかもしれないからだ。

抜き放った鉄パイプで振り下ろされる槍を受け止める。

「わっ!？」

しかしその一撃は、女の細腕から繰り出されたとは思えないほど重いものだった。鉄パイプを両腕で持っていたても、支えきれず押し切られる。

「あら、このぐらいなら受け止められるのね？ 将来有望だわ。……やはりあなたから始末することにしてよかったようね」

「なんで——っ!？」

両足を踏ん張って全力でこらえなければ支えられない。まともな言葉を絞り

出す余裕すらなかった。

しかしブリュンヒルデは余裕を見せたいのか、そんな不完全な呻き声ですら会話として受け入れた。

「……私、偉大な主から嚴命を受けているの。クロツカーズ自身だけではなく、禍根を残さないようにその子供まで始末する——恨むなら、クロツカーズの子供として生まれたあなたの運命を恨みなさい」

受け止めている槍の重さはわずかも変わらないというのに、女は驚くほど巧みな体重移動で横合いから蹴りを放ってきた。

「くあっ!?!」

腰を落としてなにが起こっても対処できるように身構えていたというのに、その構えごと刈り取られるような勢いで吹き飛ばされた。

気づいた時には地面に投げ出されていた。

正直に言つて、いくら長身だからといって女にあつさり蹴り飛ばされるのは

シヨックだが、ヒカリは自分が思ってもみなかったほど冷静だった。

「距離が取れた！」

吹っ飛ばされたおかげで距離が開いたのだ。

無防備だったさつきまでとは違う。仁の言葉に従うことに躊躇いはなかった。姿勢が崩れても、無様でも気にせず、這うようにしてブリュンヒルデから遠ざかる。

背後から投げかけられるのは呼び止めの声ではなく嘲笑だった。

「うふふふ、元気のいい坊やだこと。さあ、逃げなさい。もつともつと、逃げなさい」

ヒカリが逃げ去ろうとしていることに、まるで昂ぶりを感じるように声が艶めいてくる。

追いかけられることよりその異常性に背筋がざわめく。

「坊や、覚えておきなさいな。槍はね、突き刺すだけではなくて、投げるとい

選択肢もあるのよ」

投擲。

その二文字が頭の中に閃いた瞬間と、
ヒカリが反射的に振り向いた瞬間と、

——ぞむっ、という肉を貫く音が聞こえたのは、完全に同時だった。

「ぐはっ——!？」

「父さんっ!？」

だが肉を貫かれたのはヒカリではない。

離れた場所でカリカに足止めされていたはずの仁に、その左肩に、深々とブリュンヒルデの槍が突き刺さっていたのだ。

「ジン—！」

銀髪の少女が悲鳴を上げる。

その悲鳴を聞いて、ヒカリは初めて仁が自分を庇って槍を浴びたのだと気が

ついた。

「ヒカリ！」

激痛をこらえているのか絞り出すように息子の名を呼びながら仁が振り向いてくる。血まみれの手でヒカリの両の頬を押さえる。

ポタポタと、ヒカリのパーカーに仁の赤い血がしたたり落ちてきた。



「父さん、父さん！」

「聞け！ お前がクロツカーズを継ぐんだ！」

「クロ？ クロツカー？ なんだよそれは！ それより医者に診せなきゃ！」
明らかに重傷だ。

大きな血管が傷ついていたら、早く止血しないと失血死してしまう。それでも仁は構わず自分の体を覆う謎めいた防具に手を伸ばした。

どんな仕組みかはわからないが、赤い防具や日本刀らしき武器が光の粒子に分解され、そして再び結実した時には一つの懐中時計として仁の手の中に納まっていた。

「これを、持っていけ、使い方はウルが教えてく、れる」

ゼエゼエと苦しげな息づかいの合間に言葉をねじ込んでくる。

「ウル、これからは、息、子と契約をして守ってやってくれ」

銀髪の少女はウルという名前であるらしい。

「それが、あなたの望みであるというのなら」

彼女は沈痛な表情を浮かべて仁の言葉を聞いている。ウルの記事を聞いて、仁は「よくできた」とばかりニヤリと笑った。

「ふん、ずいぶんと、出来の悪い茶番劇ね」

それまでそれを見守っていたブリュンヒルデが冷笑を浮かべる。

「カリカ、足止めすら満足に果たせないの？」

「あ、だ、だって、いきなり目の前から消えたんだもん！ 身代わりになってそ

いつを助けるなんて、考えもしなかったんだもん！」

「まあいいわ。所詮半人前のお前に多くを期待した私が間違っていたということかとね……」

「うう……」

「それに、七時の王。あなたにも失望したわ。その様子では限界も近いでしょうに、残り少ない体力を反撃のためではなく息子を救うために使い、なおかつ致

命的な傷を負うなんて……。息子さえ見捨てていけばもう少し戦えたでしょう。いえ、クロツカーズとしての真価を発揮すればこの場を切り抜けることすらできたかもしれない……」

ブリュンヒルデは敵対しているのを忘れてしまったかのように、仁の立場に立って戦況を分析しはじめた。

「クロツカーズに敗退は許されない。だというのに軽率な行動を取って勝機を失う……。あなたの王座はずいぶん軽いのね。王座とは、他者を犠牲にしようとも、情を捨てても守り抜くもの。それがその座にある者の義務ではなくて？ 我が主とは大違い」

「ふん、あんな、背骨にまで軍人氣質が染みこんだヤツと一緒にするなよ」

「負け犬の皮肉は惨めなだけよ。どちらにしても、これでお別れだわ」

「させるかっ！」

ヒカリは咄嗟に押しつけられていた懐中時計を握りしめた。

仁が大切にしていた古い懐中時計である。何度か店で見た記憶があった。これが高んなのかはわからない。ただ、この場にあつて唯一、ヒカリと仁の命をつなぐものである確信だけがあつたのだ。

意思を持って懐中時計を受け取ったことを、まるで懐中時計自身がわかつていたかのように、それは即座に答えてくれた。

仁の体から離れ懐中時計となったプロセスをそのまま巻き戻すかのように、光の粒子が広がりヒカリの左半身を覆って固定された。

左肩、左腕、左脚。

仁とは反対側に出現した防具の色は白。

おそらく使い手の個性に合わせて特性が変化するのであろう。左右が逆なのは、ヒカリが左利きなのに合わせたとしか思えない。

影響は肉体にまで及ぶのか、わずかに見える自分の前髪がかすかに青く発光しているようだった。

そして仁が提げていたのは日本刀であったが、ヒカリが左手に握っていたのはフェンシングで使うレイピアのような武器だった。

状況に反比例して頭の中はクリアだ。ただ一つだけ、父親を救うことだけを考えていた思いに対して、体は率直に答えてくれた。

「父さんはやらせないっ！」

日々積み重ねた練習が体を突き動かす。

一瞬で踏み込み左腕に出現したレイピアを突き込んだ。恐怖も、迷いもない、会心の踏み込みだった。

その突きを、しかしブリュンヒルデは防ぐ。

「なっ!？」

片手で無造作に持ち上げた槍の柄の部分で、レイピアの細い切っ先を受け止めたのだ。まるで点で点を受け止めるような離れ業である。

「ふふ、迷いのない、よい一撃ね。さすがは七時の王の跡取りということかしら

……」

「だから、七時の王とか何のことだかわからないんだよっ！」

「教えてあげてもいいのだけれど、それをまとったからにはさっきのようなお喋りをする余裕は与えない。全力を以てあなた達を消し炭にしてあげる」

ブリュンヒルデは無造作に槍を払う。たったそれだけで、全体重を掛けていたヒカリが押しつけられてしまった。

体勢を崩したたらを踏んだ隙に、ブリュンヒルデは素早くその場から跳び退き、そして槍を投擲する体勢を取った。

先ほどの一撃を思い出す。

だが構えられた黒い槍の先端には、強烈なエネルギーが凝縮されていく。先ほどの攻撃ではない。先ほどの攻撃を遥かに凌ぐ何かがやってくる。

わかるのはそこまで。

ヒカリは圧倒的な恐怖で動けなくなっていました。そのことを自覚する

と余計に頭は真っ白になり、何かを考える余裕などあっさりと蒸発して消え果てる。

その時、武装を解き無防備になっていたはずの仁が、再びヒカリの前に立ちふさがった。

「どうして——!?!」

唯一の武器を自分に託したはずではなかったのかとヒカリは言外に詰問する。それに対する答えはなく、仁はただ笑っただけだった。

これまでに見たこともないような、優しい、満足げな笑みである。ヒカリは父親の笑顔をあまり見たことがない。仁は無愛想で、感情を表に出すということをあまりしない。決して冷たいわけではなく、いつも行動で愛情を示してくれる、そんな父親だったのだ。

そんな仁が笑った。

だが、見慣れない笑顔の理由を問う猶予は、残されていないかった。仁の体の

向こう側でブリュンヒルデが槍を投擲する。次の瞬間、ヒカリ達は凄まじい爆音と閃光で揉みくちやにされていた。

上下左右の感覚は消え失せ、強烈な閃光によって視界は塗りつぶされ、爆音によって耳がおかしくなる。

残っているのは強烈な衝撃によって揉みくちやにされ息が詰まる圧迫感だけだ。

時間にして一分もなかっただろう、その衝撃の嵐が過ぎ去った後、ヒカリが恐る恐る目を開くと、全てがなくなっていた。

——街がなくなっていた。

自宅だけではなく、周辺の家や建物や道路が、ずたずたに破壊され土壌がむき出しになっている。

——敵もいなくなっていた。

自分の技に絶対の自信があったのか——周辺の状況を見れば当然だろう

——ブリュンヒルデもカリカも、既にこの場を後にしていた。

——そして、父親もいなくなっていた。

昨日まで、あたりまえのどこにでもいる父親だと思っていた仁は何か凄まじい力を持っていて、それでおそらく身を挺してヒカリを、ヒカリともう一人——ウルを救ってくれたのだ。

いつの間にかヒカリの体を覆っていた防具は消え、そして左手には見慣れない腕時計がはめられていた。文字盤が仁から手渡された懐中時計と同じものだと気づく。

ヒカリの体を覆った時、深紅から白へと色と形を変えたように、装着者によって時計状態の形状も変化するのだろうか。

何もわからないことばかりなのに、そんなどうでもいいことにだけ頭の中はよく回った。逃避行動なのだ。

自分で自分の誤魔化しを当てこすりながら、ヒカリはただ呆然と、廃墟とな

った街に立ち尽くしていた。

「……消えてしまいました」

ポツリと漏らしたウルという言葉は、一体何に対して紡がれたものだったのだろう。それを考える気力も、今のヒカリには残されていなかった。

「私は契約した主を守り切れなかった。そのことを謝罪します……」

ウルは、こちらを見ず、地面に視線を落とすしていた。

そこが、おそらく仁が最後に立っていた場所だと気づき、ヒカリは逆に横に目を逸らした。

「君は、何なんだ……」

わからないことだらけで、何から聞いていいかもわからなかった。

「私はクロツカーズの主契約者」

「クロツカーズ……?」

「この世は、一二のバースに分かれています。一般的な言葉でいえば、並行世界。」

あるいは単に異世界と理解しても構いません。この一二の世界は互いに相争っています。全ての世界を統べる者が時空を支配すると言われているからです。悠久の昔から続けられた戦争、時計戦争と呼ばれている争いです」

ウルが言っていることは、理解の範疇をさらに超えていた。

「時計戦争……」

おそらく、こんな状況だというのにヒカリはポカンと間抜け面を晒していただろう。明らかに理解していなかった様子だっただろうに、ウルはまるで構わず言葉を続けた。

「負ければ、世界が減びる……。一二の世界があると言いましたが、既にその内の一つの座は存在していない。以来、時計は九時を刻まなくなりました。それはバース9が争いに負けて滅びたから。9を滅ぼしたのは4。そして今、この世界に攻め込んできたのも4の軍勢」

彼女の言葉は酷く概念的でこの上なく理解しづらかった。

九時が存在しないからどうだというのだろう。理由はわからないが、九時は飛ばすのが慣例ではないのか。迷信深いホテルで「4」のつく部屋がないのと同じではないのかと考えかけ、ヒカリには既視感に近い奇妙な違和感を覚えた。

「僕が聞きたいのはそんなことじゃない！ どうして父さんがあんな目に遭わなきゃいけないかってこと——」

「いいえ、聞いてもらいます。そうでなければジンとの約束を守れませんから」
ヒカリの気持ちを無視した物言いに、反感が募る。

——しかし、

「あれを見てください」

その荒唐無稽な与太話は、ウルが指さした方向を見た瞬間、ひと目で現実なのだとは証明されてしまったのだ。

彼女が指さしたのは北の空である。港区の方角……区内でも北部、六本木のあたりかもしれない。

ひと言で表現するなら、それは浮遊する城郭。

周囲は既に日が落ちてしまっていたが、周囲のビルや街灯から放たれる光によつて不気味な存在感を持って浮かび上がっていた。

用途はわからないが、明らかに人工物とおぼしき、そして人が使う施設らしい建築物が、巨大な塔……、あるいは巨大樹のようにそそり立つ物体の根元に立ち並んでいる。

かなりの距離がある場所から見ているはずだというのに、その頂点が見えなかった。ヒカリにわかるのは、あれが当たり前の技術で作られたものでないことだけである。

「あれはクロノゲート。他のバースに攻め込むための橋頭堡。あれを伝って異界の戦力がやってくるのです」

「じゃあ、さつき僕を襲った犬の化け物も……?」

「そう、あれを通してやって来ました」

世界は、侵略されようとしていると彼女は告げる。

いまだに実感は湧かないが、一つだけ確かなことは、目の前の彼女がそのことについて一点の疑いも持っていないということだった。

「この世界はバース7。そしてジンは、この世界を統べるクロツカーズ……だった」

「統べるって……父さんが？」

ただの時計屋の主でしかなかったはずだ。

少なくとも生まれてから一八年間、ヒカリはそれ以外の父親の姿を見たことはなかった。

「信じられなくても、それが真実。彼はクロツカーズ、もつとわかりやすく言えば、この世界の王だった……」

一瞬、寂しげに目を伏せる。

冷血な少女だとばかり思っていたウルが、初めて見せた感情らしい感情だっ

た。

「契約は引き継がれた。でもあなたは、王に相応しくない」

「初対面でいきなり——」

「会うのは初めてでも、あなたのことは小さな頃から知っています。ストップウォッチを止めるだけしか特技のない、平凡な子供でしょう」

つまらなそうにそう言い捨てる。

「あなたがクロノギアを持っていることに文句は言いません。それはジンの……遺した言葉だから」

クロノギアというのがこの腕時計と、使う者によって姿を変える武具の名前なのだろう。

「でもあなたではジンのように戦えない。だから戦いは私に任せて、あなたは大人しくしていればいい」

「君が、戦う……?」

「そうです。これからクロノゲートに向かいます。あれを破壊して、この世界を救う。それはジンから託された遺言ですから」

遺言、という言葉が考えないようにしていた事実を突きつけてくる。だがヒカリが感傷に浸る時間を、ウルは与えてくれなかった。

ヒカリの手を取るとぐいと引っ張り歩き出す。

「どちらにしても、今は、この場を離れるのが先です。あなたを放置することはできません。私はこれからクロノゲートの破壊に向かいますが、ついてきてもらいます」

「ちよ、言ってることとやってることが……」

直前まで大人しくしていると言っていたはずではなかっただろうか。

「異論は受けうけつけません。あなたの命は私が守りますから、その点は安心して下さい」

「安心なんてできるか！」

「何より、クロノギアを持つクロツカーズにしかできないことがあります。例えば、落ち着いた時に改めて説明しますが、仲間を増やす力などもあります。いずれにしても、戦わなくても良いので、そうした力での援護をしていただきます」

「それ、自分の都合しか考えてないんじゃないか!？」

言っていることが無茶苦茶だ。それでもウルにヒカリを自由にさせるつもりがないことは確かなようだった。